

お茶の時間

ドイツの放浪職人

編集委員長



先日、ドイツの大工職人の話をテレビで見えて驚いた。「放浪職人」という、今時考えられないシステムがある。

ドイツの大工社会には、徒弟—職人—マイスターという階級制度（マイスター制度）がある。大工になりたい人は高校卒業後、徒弟として数年働き、実務年数などで規定を達成すると、職人試験を受験する。そして合格した者が職人として働くのだが、職人からマイスターへ昇格するためには2通りの方法がある。職業学校で3年間勉強する方法と、3年間（正確には3年と1日）、放浪して大工修行をする方法である。

この放浪する制度のことを「ヴァルト」と言う。この「ヴァルト」はとて

も厳しい決まりがあり、行程はすべて徒歩（一部ヒッチハイクもOKという組合もある）、持ち物は杖と風呂敷のようなものに包んだ着替えだけだ。服装も決まっていて伝統的な放浪職人の衣装（黒の帽子とジャケットで大工の仕事がしやすいような工夫がしてある）を着なければならぬ。杖もみんな同じように、一見魔法使いのようだ。そして、途中で家に帰ることが許されるのは、両親が他界した時だけだ。色々な土地を巡って、工房や建築現場を周って職を求め、稼いだお金でホテルに泊まり、職がなくお金がないときは野宿をするのだ。

テレビでは、23歳の女性放浪職人が出てきた。昔は男性だけが許されていたようだが、最近は女性も許可されている。服装は男性と全く同じで、職がないときはやはり野宿する。インタビューで、「怖くはないか」と聞かれた女性は、「この服装なら誰もが一応尊敬してくれるので、問題はない」と答えていた。

昔前というか中世の遺物のようなシステムが残っていることにドイツの文化の深さを感じる。

この「放浪職人」の意義は、一つは本人の技術の習得である。

ドイツの大工の世界というのは日本のような統一の基準・規格があるわけ

ではなく土地によって、工法や設計などに違いがある。放浪職人は、ドイツ国内はもちろん、近隣のヨーロッパ各国をまわってその土地の技術を学び、技術を取得していくのだ。

そしてもう一つの意義は、技術の拡散である。地方の独特の技術を学んだ「放浪職人」が次の場所と共に仕事をしながら広めていくのだ。言い換えれば、放浪職人が技術の「ハブ」として大工ネットワークを繋いでいるのだ。

日本にも職人という制度はあるが、積極的に他の流派の技術を取り込んだり、逆に技術を他の流派に広めるような姿勢はない。どちらかと言えば、日本の職人集団は閉鎖主義的であるような気がする。

ドイツでは、伝統は伝統で守るけど、その中で新たに発展をして行こうという文化があるのだろう。そしてその文化を続けるのに、「ヴァルト」は有効な手段なのだ。

組合長の言葉を借りれば、3年後、マイスター試験に臨む時、職業学校を卒業した者と放浪した者の最大の違いは「自信」なのだ。自分自身で苦しむ思いをしながら技術を学び、それを元に工夫し、新たな工法を考え、そしてそれを各地の人に伝えてゆく。その旅の中で、人間関係も含めて目に見えない成長をしているのだ。それは、単に

技術・技能だけでなくソフト面での成長が大きいのではないかと。

職業学校では感じられない、各地の現場でのそれぞれのマイスターのリーダーシップ・職人や徒弟の心などが学べることも大きな財産になるのだろう。テレビでは、6週間仕事に出会っていない「放浪職人」が登場したが、黙々と歩き続ける中で、「人生とは何か」「自分の仕事とは何か」など、自分と対話するのだそうだ。彼らが、放浪の中で出会った「放浪職人」は、仲間という枠を超え、家族のようなものだという。

彼らの放浪を通して得られた成長・自信・達成感がまた新たなモチベーションとなり、ドイツの大工業界を支えているのだと感じる。

知的財産を権利化している社会では成立しない話だと思いが、なぜドイツでは、このシステムが維持できるのだろうか。不思議ではある。

と言っても、こういう伝統的な放浪修行を経て大工になる人はとても少なく、最近では姿を見かけなくなっているそうだ。2010年の統計では、「放浪職人」は450人である。

自ら進んで放浪修行を選ぶ若者達は技術を習得するだけでなく、あらゆる状況の中で自分を極めようとする余程の覚悟がいることだろう。